

地歴公民(歴史総合・世界史探究) 一橋大学 (前期) 1/1

<全体分析>

試験時間 120 分

解答形式

I・II・IIIすべて論述式

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易(易化・**やや易化**・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

400字3題の出題は不変である。2026年度は、IIIが問1・問2あわせて400字以内の分割形式となった。2025年度は、IIIで単語記述が出題されたが、それ以外に分割された問題はなかったため、昨年度に続き400字3題の出題となった。Iは欧州の中世・近世、IIは欧米の近世・近代・現代史、IIIは近代・現代のアジア史の枠組みが定番となっている。資料の読解を含む問題が多いが、2026年度はI・II・IIIのすべてに資料が出題され、IIIの間2では【表】としてグラフも出題された。

その他トピックス

昨年度と同様に、IIIは歴史総合からの出題で、2025年度「完全習得タイム」の問題がズバリ的中した。なお、Iの注にある「ピエモンテのこと。ミラノを中心とする地方。」については「ピエモンテのこと。トリノを中心とする地方」ではないか。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述	16～17世紀におけるスペインの世界的位置	資料『ドン=キホーテ』中の空欄Aにはスペイン、空欄Bにはオスマン帝国、空欄Cにはフェリペ2世があてはまる。世界におけるスペインの位置づけについては、オスマン帝国との対立やカトリック世界の盟主を自認したことなどを述べ、フェリペ2世の時代には極盛期を現出したが、スペインは17世紀には凋落することを説明する。	標準
II	論述	スターリン批判の背景および政策転換が社会主義陣営諸国に与えた影響	資料のスターリン批判演説における「個人崇拜」や「集団指導」などの言葉を用いつつ、スターリンの死を契機とした内外の緊張緩和を述べ、平和共存政策が社会主義陣営諸国に混乱や対立を生んだことを説明する。	標準
III	論述	アラブの石油戦略の背景と日本への影響	問1資料の新聞記事や問題文中の「1973年」から、第1次石油危機(オイル=ショック)を想起し、直接的な契機として中東戦争(第4次中東戦争)を指摘する。その背景として第一次世界大戦後にさかのぼり、委任統治領、ユダヤ人とアラブ人の対立、国連のパレスチナ分割案、中東戦争の勃発や資源ナショナリズムを説明する。問2「経済」については日本の高度経済成長が終了したことなどを述べ、「エネルギーをとりまく環境」については、グラフをヒントに石油の代替エネルギーを読み取りつつ、省エネなどで日本が安定成長して経済大国になることを述べる。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

資料問題は頻出である。やはり日頃から史料・資料問題に慣れておく必要はあるだろう。事件・事項を追いかけることに終始したり、細かい知識に偏る学習では対応できない。教科書を十分に活用し、基礎となる歴史理解の徹底につとめたい。文化史・社会史を含め基本となる通史はなるべく早く仕上げよう。そのうえで過去問研究を周到に行い、繰り返されるテーマに共通する事項・知識を確実なものとし、覚えるだけでなく、思考の材料として使えるようにしておきたい。